保育現場における外国にルーツを持つ子どもの受け入れの現状と課題

村上涼ゼミ
学籍番号 1933047 平沢真由

要約

本研究の目的は、外国にルーツを持つ子どもに通じた保育方法やその親への支援を示唆するために、保育所等に勤める保育者を対象として、外国にルーツを持つ子どもに対する保育について、インタビューを行い、保育現場における外国にルーツを持つ子どもの受け入れの現状と課題を明らかにすることであった。

近年では、日本に住む外国人が増えたことや国際結婚の増加によって両親のどちらかが外国籍であるなど、外国と様々なつながりを持つ子どもが増えている傾向がある。先行研究によると、外国籍の子どもや外国にルーツを持つ子どもや保護者が保育所等を利用する際に、言語が通じないことでコミュニケーションを図るのに問題があることや、その他に文化・宗教の問題などがあげられる。また外国籍の子どもの場合、言葉が通じなかったり、表情の作り方に関して文化による違いがあったりするため、発達障害ではなくても発達障害と混同されやすい傾向がある。そのため小学校への進学の際の就学相談で、特別支援学級への進学を勧められることがあるが、文化差や言葉の問題であるため、このような問題に対しても喫緊に対策が必要と考えられている。

実際の保育現場では、ジェスチャーや簡単な英単語を使ってコミュニケーションを図る工夫をしていることや、宗教の問題では除去食や代替食を提供することなど、外国籍等の子どもや保護者に配慮をしながら保育に取り組んでいることが分かった。また外国籍等の子どもの存在が、日本以外の国の文化を知るきっかけになり、異文化理解に繋がっている。

研究を通して、日本と海外との文化の違いに差があることを感じたが、日本の文化を押し付けるのではなく、お互いの文化を尊重し、認め合うことが大切であることが重要だと示唆された。また「外国人だから」と特別扱いをするのではなく、日本人でも外国人でも宗教やコミュニケーションの方法に配慮が必要な場合もあるが、配慮しながらも外国にルーツを持つということを、その子どもの個性として捉え、保育者として関わっていくことが大切であると考える。